

美しき清流は太古の森の雫より

第五話：吹き寄せの巻き（引田堰堤の編）

初夏の香りが漂うこの季節になると、自然に秋川に足が向いてしまうのは「チャラ三郎」だけではなく、流域の多くの人の習慣的な暮らしであった。

弾むような足取りで寺坂を下ると柚子の香りが脳神経にまでしみ渡ります。

土手から砂利道を下りると右手がポート場、左手は堰堤を経て引田橋に至ります。

引田橋は現在の橋位置より 50M 程下流の水門口のところに架かっており、橋を渡った川向こうには蓮華畑が一面に広がっていき豹止め山へと続きます。

5 月になると子共会を中心に川掃除を行わない夏場の川遊びに備えます。

上流から流れ出た木の根を除けたり、ポート場回りの草を刈ったりしたものでした。

水のぬるみが初夏の訪れを感じさせ、この日を境に「チャラ三郎」は川遊びに明け暮れる日々が続くようになります。

白泡の立つ酸素量の多い浅瀬には水生昆虫が豊富に潜んでいるので、大淵の深みで冬を越したハヤ達も大きく生息域を変化させて行きます。

捕食を繰り返し、体力の回復が進むにつれ活動範囲も広くなります。

この時期になるとハヤの魚体が黒く錆び始め、口元から尾ビレにかけて朱色に染まり産卵期に入ります。



産卵は水通しの良い小石底の浅瀬に数百匹が重なり合うように群がって行います。

この鮮やかな朱色の魚体に染まった、吹き出すように群がるハヤを「フキッパヤ」と呼び、産卵床に寄せ集まる様子を「吹き寄せ」と言います。



水面が僅かに波立つようにアーチ状に石を積み上げ、鍬で小石底を掻き混ぜるように洗い、人工の産卵床を作ったものでした。

2日～3日もすればハヤが群がり産卵が開始されます。



今でも、この時期になると秋川漁協にて産卵床を作りハヤの保護が続けられています。

「秋川チャラ三郎」